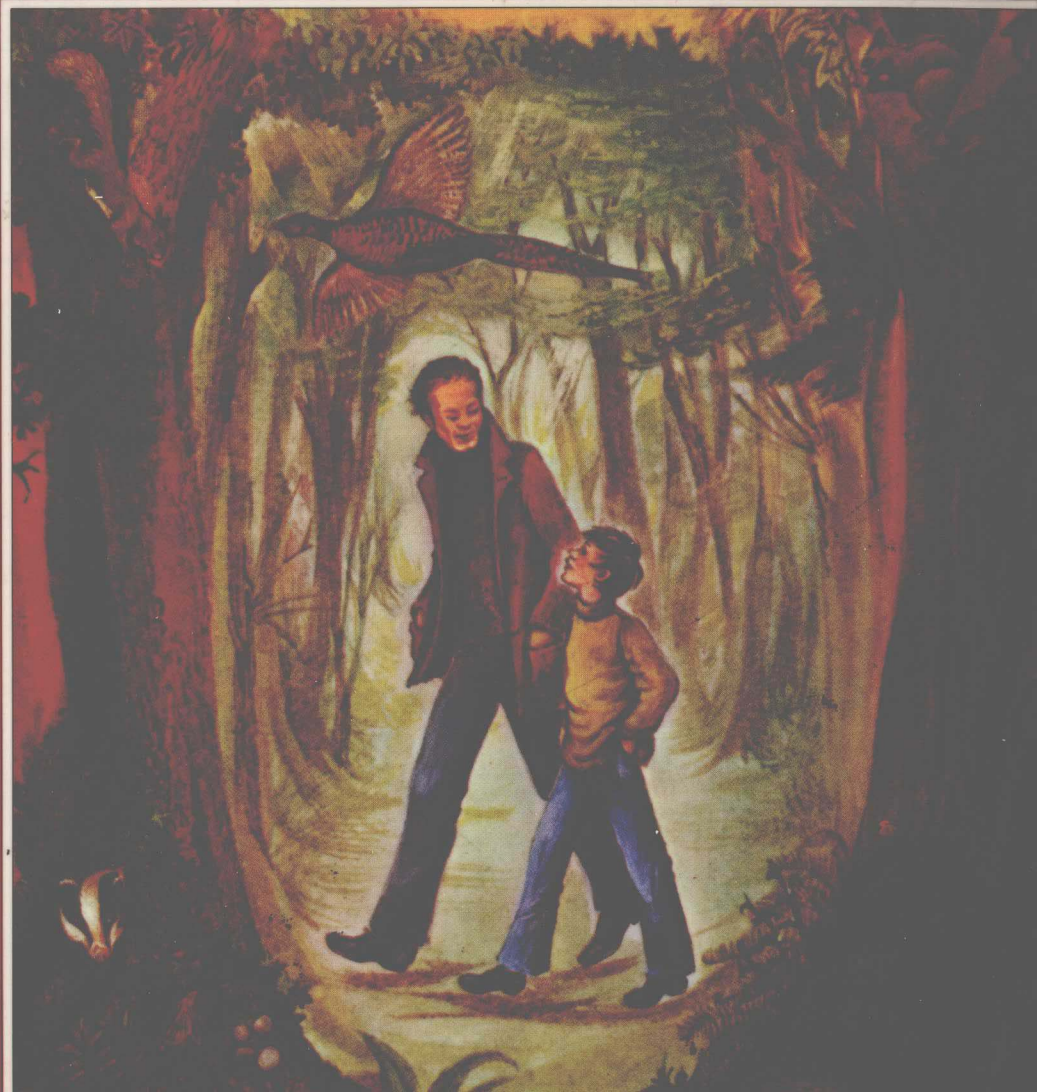


ロアルド・ダール作
小野 章 訳

ダニィと父さん
の 物 語

ぼくらは 世界一の 名コンビ!



■評論社の児童図書館・文学の部屋

ぼくらは世界一の名コンビ！

一九七八年六月三〇日 初版発行

一九九五年五月三〇日 九刷発行

● 訳者 小野 章

● 発行者 竹下晴信

● 発行所 株式会社評論社

〒162 東京都新宿区筑土八幡町二二二

電話代表〇三三二六〇九四〇一

振替〇〇一八〇一七二九四

● 印刷所 凸版印刷株式会社

● 製本所 凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本は本社にておとりかえます。

商標登録番号 第七三〇九七号 第八五三〇七号 登録許可済

ロアルド・ダール 作 小野 章 訳

ぼくらは世界一の名コンビ！

——ダニィと父さんの物語——



DANNY
The Champion of the World

by

Roald Dahl

Original English language edition published
by Alfred A. Knopf, Inc., New York
Copyright © 1975 by R. Dahl
Japanese translation rights arranged with
Murray Pollinger, London through
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

ニューヨークの出版社からひとこと

作者のロアルド・ダールさんから、出版社に注文がありました。はじめにこの本の中身について、ひとこともいってはいけないというのです。「はじめに中身を話したら」とダールさんはいます。「元も子もなくなってしまう」

そんなわけで、出版社といたしましては、この本は、ある男の子と父さんのわくわくするようなキジ捕りの冒険のお話で、おもしろいですよとしかいえないのです。それから、もうひとつ、これならいってもかまわないでしょう。その男の子ダニィのことばをかりれば、その父さんは、「真正正銘、掛値なしに、この世界で一番すばらしい、たのしくてわくわくする父さん」だということです。

ぼくの妻と子どもたちへ――

パット

テッサ

テオ

オフエーリア

ルーシィ

も
く
じ



12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
木曜日、そして学校	眠れる愛しのキジ	キジ撃ち祝賀パーティ	スベンサー先生	落とし穴	ベビー・オースチン	ビクター・ヘイズル氏	秘密の仕掛け	父さんの秘密	自動車・颯・軽気球	やさしい巨人の話	給油所
139	130	117	107	88	72	63	52	38	25	17	11





22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
ぼくの父さん	スペンサー先生のお手柄 てがら	あばよ、ヘイズルさん	乳母車 うばぐるま の赤ちゃん	家路	タクシー	世界チャンピオン	森番	森で	金曜日
261	252	237	224	216	209	194	186	170	162
269	271								
ダールさんからの伝言	あとがき								

ぼくらは世界一の名コンビ！

——ダニィと父さんの物語——



1 給油所

ぼくが生まれて四カ月目に、母さんが急病になって死んだので、世話がやけるぼくを残された父さんは一人ぼっちになった。これが、そのころのぼくの姿だ。ぼくには兄弟も姉妹もない。

だから、ぼくが生まれて四カ月目からずっと、ぼくの家は二人きりの家族だった。父さんとぼくだけのね。

ぼくたちは、給油所のうしろにある古いジブシーの箱馬車で暮した。父さんは、給油所と箱馬車、そのうしろにひろがっている少しばかりの土地の持主だが、

それだけがこの世界で父さんが所有しているものだ。野原と森の丘に囲まれた田舎道のそばの、とてもちっぽけな給油所なんだ。

ぼくがまだ赤ちゃんのとき、父さんはぼくの食事の世話から、お湯に入れてくれたり、おしめをと리카えてくれたり、何から何まで、普通なら母さんのする仕事を全部、自分の手でしたんだ。自動車のエンジンの修理をしたり、お客さんの車にガソリンを入れたりして働くのといっしょに、そんなことをするのは、男として楽な仕事じゃない。

しかし、父さんは、そんなことはちっとも気にかけていないようだ。きっと、母さんが元気なところに、母さんに感じていた愛情を、全部ぼくにむけてくれたんだとぼくは思っている。とても小さかったころ、ぼく

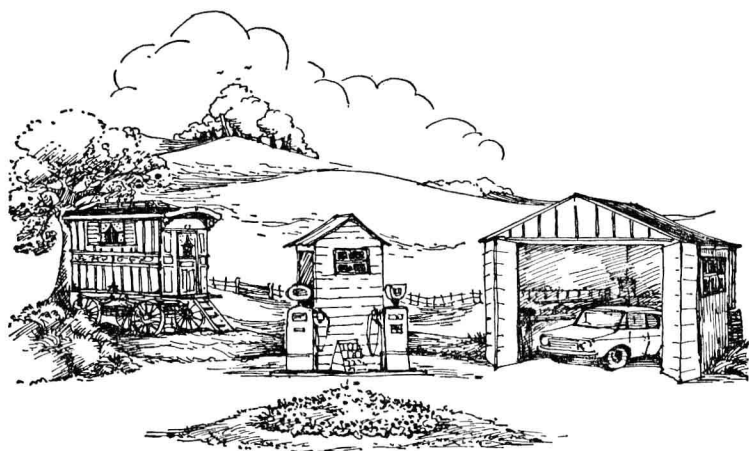


はほんの少しでもみじめな気持ちになったこともないし、病氣にかかったこともなかった。前のページの絵は、ぼくの五歳の誕生日のときの姿だ。ごらんの通り、油だらけのだらしない恰好かつこうをした男の子だけど、ほとんど一日中、修理工場で車の修理をしている父さんの手伝いをしていたから、そんな恰好も仕方がないんだ。

給油所といっても、二台の給油ポンプがあるだけで、うしろに木造の小屋があつて事務所になつていた。事務所にあるのは、古いテーブルが一つと、お金を入れる金銭登録器レジスタ一台だけ。この金銭登録器というのは、ボタンをおすと、ベルが鳴って、抽出ひきだしがガチャンと恐ろしい音をだしてとびだしてくるやつだ。ぼくは、これにお金の出し入れをするのが好きだった。

事務所の右手にある四角い煉瓦建れんがてが、修理工場だ。父さんが一人で念ねんを入れて建てた工場で、ぼくの家ではただ一つのがっしりした建物だ。「わたしたちは、おまえもわたしも、修理工だ」と父さんは、よくぼくにいった。「自動車のエンジンを修理して食っているんだ。ボロ工場では、いい仕事はできないさ」自動車が一台、楽に入つて、まわりには仕事をするのに充分な空あきがある、立派な工場だ。工場には電話があり、お客さんは電話で自動車の修理の打ち合わせをした。

箱馬車は、ぼくたちの家であり、家庭だ。これは大きな車輪つきの本物のジブシーの馬車



で、全体に黄と青で美しい模様もようが描えがいてある。父さんの話では、少なくとも百五十年も昔のもので、たくさんジブシーの子どもたちがこの馬車で生まれ、育ったんだそうだ。この古い箱馬車は、馬にひかれて、イギリスの道を何千マイルも動いたにちがいない。車輪の木のスポークがくちて落ちそうになっているので、父さんは下に煉瓦れんがを敷しいて補強ほきょうしている。

箱馬車の内部は一部屋、それもちょっとした浴室ゆすいほどの広さもない部屋だけ。狭い部屋で、箱馬車の形がそのまま部屋の形になっている。入口からむかって突き当りの壁に、二段ベッドがつくりつけてあって、上が父さん用で、下がぼく用だ。

修理工場には電気がきているけれども、箱馬車では電気は使えなかった。電気会社は、今に

もこわれそうな箱馬車の中には、危あやなくて電線を入れたりできないというのだ。だから、ぼくたちは光熱設備については、むかしのジブシーとあまりかわらないやり方をしていった。冬の暖房用だんぼうには、箱馬車の屋根に突きだした煙突えんとつつきの薪まきストーブだし、お湯ゆをわかしたり、料理をするのには石油コンロ、電燈がわりに天井につるしてある石油ランプというわけだ。

お風呂ふろに入るときは、父さんはお湯をわかして、たらいに入れる。湯加減かげんを見て、ぼくを裸はだかにして、たらいの中に立たせ、全身を洗ってくれる。これで浴槽よくそうに入ると同じぐらいきれいになるとぼくは思う。いや、もっときれいになるかもしれない。たらいに立ったままだから、浴槽のように体を洗ったあとのきたないお湯の中にしゃがんでいることはないからだ。

家具としては二人分の椅子いすと小さなテーブル、それに小さな整理ダンスが一つ、それで全部で、それだけで、ぼくたちは充分だった。

便所は箱馬車のうしろの庭にある、おかしい小さい木造の小屋で、夏はすずしく快適かいてきだけど、雪が降る冬の日などは、まるで冷蔵庫れいぞうこの中にすわっているみたいだ。

箱馬車のすぐうしろには、一本の年よりのリングの木があり、九月の中頃にはおいしい熟じゅくした実をつける。四週間か五週間は毎日実を摘つんでも大丈夫だ。箱馬車の屋根の上にも